

萎縮性肝硬變症其他二三肝臟疾患例ニ 於ケル甲狀腺ノ變化

金澤醫科大學病理學教室(主任中村教授)

助 手 中 谷 恒 藏

(昭和12年3月2日受附)

目 次

緒 論	第4章 考按
第1章 検査材料並ニ研究方法	第1節 間質
第2章 所見	第2節 實質
第3章 所見概括	第5章 結論
第1節 間質	文 獻
第2節 實質	

緒 論

萎縮性肝硬變症例ニ於テソノ甲狀腺ニ間質結締織ノ増加アルコトハ、可ナリ以前ヨリ諸氏ニヨリテ認メラル、トコロナリ。

然ルニ此ノ兩者ノ關係ニ就キ詳細ナル研究ノ發表セラレタルモノハ比較的少シ。一昨年本田一高橋兩氏⁽¹⁹⁾ニヨリ新ニ此ノ方面ニ關スル研究ノ發表セラレタルアリ。余ハ金澤醫科大學病理學教室ニ於テ保存セラレタルモノノ中、萎縮性肝硬變症、其他2—3肝臟疾患例ニ就キ其ノ甲狀腺ヲ檢索シ、少シク所見ヲ得タレバ茲ニ之ヲ報告セントス。

第1章 検査材料並ニ研究方法

本研究ニ用ヒシ材料ハ何レモ我ガ病理學教室ニ於テ剖檢セラレ、5%「フォルマリン」水中ニ貯藏セラレタルモノニシテ、22例ノ萎縮性肝硬變症、5例ノ分葉肝、5例ノ鬱血性肝硬變症、2例ノBanti氏肝硬變症及ビ1例ノ小兒期輕度肝硬變症ノ肝臟及甲狀腺ノ各組織片ヲ用ヒタリ。

肝臟ニテハ各1—2ヶ所(臟器ノ場所的關係ハ不定)ヨリ、甲狀腺ヨリハ其ノ兩葉ヨリ各可及的廣範圍ニ亙ル組織片ヲ採リ、何レモ法ノ如ク「アルコール」脱水硬化、「ツェロイデン」包埋載片ヲ作り、「ヘマトキシリン」—「エオジン」染色、van Gieson氏染色及ビ淺井氏格子狀纖維塗銀法ヲ施セリ。又甲狀腺ニ於テハ別ニ小片ヲ採リ福士氏ニヨル「ゲラチン」包埋載片ヲ作り「スズンIII」—「ヘマトキシリン」染色法ヲ併セ施セリ。(材料ノ選擇ニ關シテハ敎室先輩岡田氏ノ調査ニ俟ツ所多シ。茲ニ同氏ニ敬意ヲ表ス)。

第2章 所 見

甲狀腺ノ變化ヲ主體トシ、肝臟ノ變化ヲ參考トスルニ止メタリ。以下各例ノ所見並ニ病理解剖上診斷ヲ表示スレバ次ノ如シ。

検査番號		1	2	3	4	5	
剖檢番號		1715	1384	1954	1491	2095	
年齢及性		23歳 ♂	37歳 ♂	38歳 ♂	39歳 ♀	46歳 ♂	
主ナル病理		右肺壞疽 輕度肝間質炎 右側化膿性肋膜炎 兩側肋膜癒着 薦骨部褥瘡	肝原發癌 肺轉移癌 淋巴腺轉移癌 全身浮腫 肋膜癒着	大脳出血 心肥 大 輕度黃疽 輕度萎縮腎 輕度肝間質增殖 性炎 脾動脈硝 子樣變性 高度動脈硬化症 兩側肋膜纖維性 癒着 肺水腫及 輕度氣管支肺炎	手術後 分割脾 肝硬變 輸膽管炎 降臟硬變	肝硬變 腹水 脾腫大 心外膜 及肋膜點狀出血 肺鬱血及出血 迴腸憩室 胃出血性糜爛 氣管及氣管支淋 巴腺石灰化	
肝臟	硬變ノ種類	萎縮性肝硬變	同	同	同	同	
	間質結締織	中等	中等	輕度	高度	高度	
	重量	1005	2770	1340	不明	835	
剖檢時腹水量		1000	2000	ナシ	500	5450	
脾臟重量		128	405	150	198	120	
甲状腺	重量		15	不明	25.5	14	7.4
	間質	結締織	稍多シ	多シ	中等	稍多シ	稍多シ
		膠維格子狀纖維	稍多シ	多シ	中等	中等	稍多シ
		細血管充盈度	弱シ	強シ	弱シ	中等	中等
	濾胞	形状	多角形ノモノ多シ	類圓形ノモノ多シ	多角形	略尋常	類圓形ノモノ多シ
		大サ	中等ナルモノ一部ニ巨大ナルモノアリ	中等	稍大ナルモノ多シ	一般ニ中等ナルモノ稍大ナルモノアリ	中等
	濾胞内容	形状	低キ骰子形ノモノ多シ	圓キ核ヲ有スル骰子形ノモノ多シ	低キ骰子形ノモノ多シ	稍低キ骰子形ノモノ多シ	骰子形ノモノ多シ
		「リボイド」顆粒	中等	中等	少シ	少シ	多シ
		褐色色素顆粒	僅少	稍多シ	僅少	僅少	稍多シ
		膠樣質性狀	淡紅色同質性	淡紅色同質性ナルモノ帶青色ノモノ亦多シ	淡紅色同質性	淡紅色同質性	一般ニ淡染、顆粒狀ノモノ多シ
稀薄或ハ消失		中等	稍多シ	稍多シ	稍多シ	稍多シ	
濾胞内容	上皮細胞剝離	稍多シ	中等	少シ	中等	少シ	
	空胞	少シ	中等	少シ	中等	稍多シ	
	特殊物質	結晶	赤血球	赤血球	結晶	結晶、赤血球	
備考		結節性増生ヲ示ス部アリ 「ポルスター」ヲナセル部アリ	少數ノ脂肪細胞アリ		結節性増生ヲ示ス部アリ	少數ノ脂肪細胞アリ 上皮性細胞巢アリ	

6	7	8	9	10	11
1690	1907	1532	1821	1592	1235
47歳 ♂	48歳 ♂	49歳 ♀	50歳 ♂	52歳 ♂	25歳 ♂
肝原發癌 氣管支淋巴腺、後腹膜淋巴腺轉移癌 橫膈膜轉移癌 輕度胃潰瘍出血性腹水	右側膿胸 右無氣肺 胃鬱血及糜爛脾及腎鬱血 輕度心肥大 肝硬變	腹水 肝硬變 左肺開放性結核 空洞 胃潰瘍 結腸、直腸結核性潰瘍 肺鬱血 兩側カタル性氣管支炎 兩側肋膜纖維性癒着 蟲樣突起閉鎖	肝硬變 食道靜脈瘤破裂 腹水 小腸淋巴減胞出血 脾腫大 胃鬱血	腹水 全身浮腫 瀰蔓性肝間質炎 慢性大動脈中膜炎 左腎粟粒大纖維腫 肺鬱血及水腫「カタル性氣管支炎	全身浮腫 兩側胸水症 心筋肥大 右肺尖氣管支肺炎 胃出血性糜爛 肝硬變
同	同	同	同	萎縮性肝硬變ト微毒型トノ混合型	萎縮性肝硬變
中等	中等	高度	高度	中等	不檢
不明	1655	605	不明	855	1080
3500	ナシ	2100	2300	2500	2500
179	110	180	303	73	140
不明	不明	11.5	11.0	10.4	不明
稍多シ	多シ	多シ	多シ	甚多シ	多シ
稍多シ	多シ	多シ	稍多シ	多シ	稍多シ
強シ	中等	中等	中等	強シ	強シ
類圓形ノモノ多シ	略尋常	類圓形	略尋常	類圓形ノモノ多シ	類圓形ノモノ多シ
中等ナルモ又巨大ナルモノアリ	一般ニ稍小	一般ニ稍小	中等	一般ニ小	中等
稍低キ骰子形	骰子形	骰子形	稍低キ骰子形	稍低キ骰子形	骰子形
中等	多シ	中等	中等	少シ	少シ
稍多シ	稍多シ	稍多シ	稍多シ	僅少	僅少
淡紅色同質性ナルモ帶青色ノモノ可ナリニ存ス	淡紅色同質性	淡紅色同質性	淡染セルモノ可ナリニ多シ同質性	淡紅色、顆粒状ヲ呈スルモノ可ナリニ存ス	淡染セルモノ多シ同質性
稍多シ	少シ	中等	中等	稍多シ	多シ
中等	少キ方	少キ方	多シ	少シ	少シ
稍多シ	少シ	中等	少シ	中等	中等
結晶	結晶	赤血球	結晶、赤血球	赤血球	赤血球
多數ニ結節性増生ヲ示ス部アリ「ボルスター」ヲナセル部多シ血管ニ「クノスベン」アリ	結節性増生ヲ示ス部アリ 淋巴細胞電アリ 少數ノ脂肪細胞アリ 上皮小體組織アリ 上皮性細胞巢アリ	「ボルスター」ヲナセル部アリ 少數ノ脂肪細胞アリ 結核電アリ	淋巴細胞電アリ 少數ノ脂肪細胞アリ	結節性増生ヲ示ス部アリ	血管ニ「クノスベン」アリ 上皮性細胞巢アリ

12	13	14	15	16	17
1659	1284	2152	989	1565	1698
53歳 ♀	54歳 ♂	54歳 ♀	56歳 ♂	56歳 ♂	57歳 ♂
高度全身黄疸 肝硬變 出血性 腹水 慢性膽囊 炎 多發性出血 兩側肋膜癒着 心筋及腎變性 左肺下葉氣管支 肺炎 右肺尖出 血及慢性炎	肝硬變 腹水 浮腫 輕度脾腫 大 大腸粘膜炎 血 右胸水症 喉頭「ポリープ」 慢性實質性腎炎	輕度黄疸 皮膚 出血 輕度腹膜 炎 肝硬變 脾 腫大 動脈硬化 性萎縮腎 胃筋 腫 子宮筋腫 結節性膠樣性及 瀰漫性實質性甲 狀腺腫 左腎靜 脈血栓	肺鬱血及水腫 右肋膜纖維性癒 着 心筋變性 纖 喉頭窒息位 纖 維性甲狀腺炎 肋膜並氣管喉頭 粘膜炎 點狀出 腹水 腸粘膜炎 水腫 肝硬變 副腎萎小	兩側肋膜癒着 左下葉就下性肺 炎 右肺上葉空 洞 動脈硬化症 肝褐色萎縮部 分的肝硬變	心外膜纖維性癒 着 左腎結石症 兩側睪丸、攝護 腺、副腎結核 大動脈硬化症 大動脈中膜炎 兩側氣管支及氣 管支周圍炎 輕 度肝硬變 動脈 硬化性萎縮腎
同	同	同	同	同	同
輕度	高度	高度	高度	輕度	輕度
827	1728	1770	680	700	1218
5000	ナシ	750	4000	ナシ	100
425	305	355	170	30	125
15.6	不明	31.2	不明	22.5	16.2
多シ	多シ	多シ	多シ	多シ	中等
稍多シ	多シ	稍多シ	多シ	稍多シ	中等
中等	中等	弱シ	中等	弱シ	中等
略尋常	類圓形ノモノ多 シ	多角形ノモノ多 シ	多角形ノモノ多 シ	略尋常	略尋常
中等ナルモ、巨 大ナルモノアリ	稍大、又巨大ナ ルモノアリ	大ナルモノ多シ	稍小	中等ナルモ、巨 大ナルモノアリ	一般ニ稍大
稍低キ骰子形	骰子形ノモノ多 シ	低キ骰子形	稍低キ骰子形	稍低キ骰子形	稍低キ骰子形
中等	多キ方	中等	中等	中等	中等
僅少	稍多シ	僅少	僅少	僅少	僅少
紅色同質性	淡紅色同質性、 又帶青色ニ染ル モノアリ	淡紅色同質性	紅色同質性	淡紅色同質性	淡紅色同質性
稍多シ	稍多シ	少シ	少シ	少シ	中等
中等	中等	少シ	少シ	多シ	多シ
中等	稍多シ	少シ	中等	少シ	中等
結晶、赤血球	結晶	結晶	間質ニ出血アリ	結晶	赤血球
結節性増生ヲ示 ス部アリ 「ボルスター」ヲ ナセル部アリ 腺腫アリ 脂肪細胞アリ 小豌豆大ノ多少 結節狀ヲナシテ 結締織増生セル 部アリ	結節性増生ヲ示 ス部アリ 多數ニ「ボルス ター」ヲナセル 部アリ	結節性増生ヲ示 ス部アリ 結節性膠樣性甲 狀腺腫アリ 淋巴細胞電アリ			「ボルスター」ヲ ナセル部多數アリ 血管ニ「クノス ベン」アリ

18	19	20	21	22	23
1910	1699	1406	1782	1422	1201
58歳 ♂	68歳 ♀	69歳 ♂	79歳 ♀	82歳 ♀	43歳 ♀
肝硬變 輕度脾腫大 肺鬱血及全身浮腫 右側慢性萎縮性肋膜炎 胃多發性出血 食道靜脈擴張 胃擴張腸水腫	手術後漿液性化膿性腹膜炎 全身黄疸 兩側胸水症 心内膜下出血 脾萎縮 輕度動脈硬化性萎縮腎 輕度潰瘍性膀胱炎 輕度肛門潰瘍 胃及小腸粘膜出血	左梨子狀窩癌 頸部淋巴腺轉移性癌 肋膜纖維性癒着 大動脈硬化症 腎囊胞左肺尖部硬化 痔瘡 輕度肝硬變	全身浮腫 胸水症 腹水 陳舊性大腸出血 左肺下葉脾變 脾萎縮 動脈硬化性萎縮腎 輕度肝硬變	肝硬變 膽囊内結石 右肺上葉陳舊性膿瘍 兩側部分性肋膜纖維性癒着	分葉肝 肝ゴム腫性肉芽腫 纖維性肝周圍炎 脾腫 脾腫腎性腎炎 右化膿性膀胱カタル」 腹水 右肺中葉脾變 肋膜纖維性癒着
同	同	同	同	同	分葉肝
高度	輕度	高度	輕度	輕度	高度
792	1375	860	791	580	1019
5000	450	ナ シ	600	ナ シ	8000
165	25	225	32	130	432
26	13.0	不明	8.8	不明	不明
稍多シ	稍多シ	甚多シ	甚多シ	稍多シ	稍多シ
稍多シ	稍多シ	多シ	多シ	稍多シ	中等
中等	弱シ	強シ	中等	中等	中等
多角形ノモノ多シ	多角形ノモノ多シ	略尋常	類圓形ノモノ多シ	略尋常	略尋常
稍大, 又巨大ナルモノアリ	一般ニ中等ナルモノナリニ大ナルモノ散在ス	中等	小ナルモノ可ナリ大ナルモノ散在シ又巨大ナルモノアリ	稍大ナルモノ多ク又巨大ナルモノアリ	中等
稍低キ骰子形	稍扁平ニ近キ形ノモノ多シ	骰子形	骰子形	稍低キ骰子形	稍低キ骰子形
中等	多シ	多シ	多シ	多シ	少シ
僅少	僅少	僅少	僅少	僅少	僅少
紅色ノモノ多シ 同質性	淡紅色同質性, 帶青色ノモノ可ナリニ存ス	淡紅色同質性	淡染セルモノ多シ 同質性	紅色同質性	紅色同質性, 帶青色ニ染ルモノ可ナリニ存ス
少シ	少シ	少シ	稍多シ	少シ	少シ
多シ	多シ	多キ方	多シ	中等	少シ
少シ	少シ	中等	中等	中等	少シ
	赤血球	赤血球	結晶		結晶
腺腫アリ 上皮性細胞電アリ	結節性増生ヲ示ス部アリ 脂肪細胞散在シテ多數ノ部ニミラル 血管ニ「クノスベン」アリ	血管ニ「クノスベン」アリ 軟骨組織アリ	結節性増生ヲ示ス部著シク多數ニミラル 腺腫アリ 淋巴細胞電アリ	「ボルスター」ヲナセル部アリ 脂肪細胞アリ 上皮小體組織アリ	

24	25	26	27	28	29
1628	1117	1029	1244	1303	2160
45歳 ♂	45歳 ♀	47歳 ♀	55歳 ♂	21歳 ♂	36歳 ♂
兩側肋膜癒着 左肺細葉性結核 右肺細葉性結核 空洞形成 右葉 分葉肝 肝左葉 肥大 膽石症 小腸結核 輕度 脾腫大 氣管結核 心外膜下點狀出血	肋膜癒着 全身 貧血 分葉肝 萎縮腎 微毒性 大動脈中膜炎 腦軟化 胃出血 糜爛 胃カター ル性炎 膝臟部 脂肪壞死	分葉肝 輕度脾 腫大 心筋萎小 右肺尖陳舊性結核 右氣管支淋 巴腺炎 腎炎 肋膜纖維性癒着 子宮筋腫 腹水 全身浮腫	兩側肋膜纖維性 癒着 心筋褐色 變性 胃カター ル」兼潰瘍 分葉肝 膽囊内 デストス」 左腎萎小 動脈 硬化性萎縮腎 腸癥痕 就下鬱 血性肺炎	第Ⅰ及第Ⅱ腰椎 炎及瘻孔形成 右肺下葉乾酪性 肺炎 兩側肋膜 纖維性癒着 褥瘡 腸結核 輕度肝硬變	兩側結核性肋膜 炎 癒着性結核 性心外膜炎 腹水 全身浮腫 鬱血性肝硬變
同	同	同	同	鬱血性肝硬變	同
輕度	輕度	中等	中等	輕度	中等
755	1100	720	916	723	1480
不明	ナシ	5000	不明	3300	1000
110	90	168	63	129	142
7.3	不明	不明	不明	不明	26.5
甚多シ	略尋常	稍多シ	多シ	中等	多シ
稍多シ	中等	中等	稍多シ	中等	多シ
弱シ	弱シ	中等	中等	中等	中等
類圓形ノモノ多シ	多角形ノモノ多シ	略尋常	類圓形ノモノ多シ	多角形ノモノ多シ	略尋常
中等	中等	中等	中等	稍大、又巨大ナルモノアリ	中等
骰子形	低キ骰子形	稍低キ骰子形	低キ骰子形	稍扁平ニ近キ形ノモノ多シ	稍低キ骰子形
多シ	中等	少シ	中等	少シ	少シ
稍多シ	僅少	僅少	僅少	僅少	僅少
淡紅色、顆粒狀ノモノ可ナリ存ス	紅色同質性	淡紅色同質性	紅色同質性	淡染セルモノ多シ	淡紅色同質性、帶青色ニ染ルモノ可ナリニ存ス
稍多シ	少シ	中等	少シ	中等	中等
多キ方	多キ方	少シ	少シ	少シ	少シ
中等	少シ	少シ	少シ	少シ	少シ
結晶	赤血球		結晶		赤血球
			脂肪細胞アリ 血管ニ「クノス ベン」アリ		淋巴細胞竈アリ

30	31	32	33	34	35
1299	1841	1186	1494	1458	1538
40歳 ♂	43歳 ♀	52歳 ♂	31歳 ♀	48歳 ♀	7歳 ♀
鬱血性肝硬變 脾, 腎, 胃鬱血 腎結石症 腹部靜脈擴張 兩側肋膜癒着 肝靜脈狹窄	心室隔壁アノイ リスマ」僧帽瓣 閉鎖不全 全身 浮腫 右胸水症 腹水 乾酪性氣管 支肺炎 結核 肝硬變 胃筋腫 舌及喉頭潰瘍 結節性甲狀腺腫	右肺乾酪性氣管支 肺炎 左肺結核頭 空洞 氣管及喉頭 結核性潰瘍 下空 靜脈硬化性慢性炎 鬱血性肝硬變 脾 鬱血 心筋褐色萎 縮 胃擴張 慢性胃 カタル」小腸水瀉 腫及出血 大腸潰 瘍 腹水 全身浮腫	脾剔出後肝間質 炎(Banti氏病) 脾 左下葉肺炎 脾 靜脈, 門靜脈, 肝靜脈血栓	脾剔出後肝硬變 肝臟結節性增生 門靜脈, 脾靜脈 血栓 心筋脂肪 變性 肋膜, 心膜 外膜下, 心內膜 下, 小腸出血 輕度胃潰瘍 萎 縮腎 胃靜脈鬱 血及血栓	全身貧血 間質性肺炎 纖維性脾炎 輕度肝硬變
同	同	同	Banti氏肝硬變	同	小兒期肝硬變
中 等	輕 度	高 度	輕 度	中 等	中 等
不 明	950	1050	1295	845	512
ナ シ	1400	2500	不 明	2300	ナ シ
203	不 明	105	不 明	638(手術剔出)	36
不 明	15.5	不 明	12.8	不 明	3.8
中 等	多 シ	稍多シ	稍多シ	稍多シ	中 等
中 等	稍多シ	稍多シ	多 シ	稍多シ	中 等
中 等	弱 シ	中 等	中 等	弱 シ	弱 シ
略尋常	略尋常	略尋常	類圓形ノモノ多 シ	略尋常	略尋常
稍 小	大小著シク不等	稍 大	一般ニ大, 又巨 大ナルモノアリ	一般ニ小	小ナルモノナリ ニ大ナルモノ散 在ス
稍低キ骰子形	骰子形	稍低キ骰子形	低キ骰子形	稍扁平ニ近キ形 ノモノ多シ	低キ骰子形
少 シ	少 シ	少 シ	少 シ	少 シ	少 シ
稍多シ	僅 少	稍多シ	僅 少	僅 少	認メズ
紅色同質性	淡染セルモノ多 シ同質性	淡紅色, 帶青色ニ 染ルモノ及顆粒狀 ノモノ可ナリニ存ス	淡紅色同質性, 帶青色ニ染ルモ ノ可ナリニ存ス	紅色同質性	紅色同質性
少 シ	多 シ	稍多シ	少 シ	少 シ	少 シ
多 シ	少 シ	少 シ	少 シ	少 シ	中 等
少 シ	中 等	中 等	少 シ	少 シ	中 等
	結 晶		結 晶	結 晶	
血管ニ「クノス ベン」アリ	結節性增生ヲ示 ス部多數アリ 結節性甲狀腺腫 アリ 淋巴細胞竈アリ	上皮性細胞巢アリ		結節性增生ヲ示 ス部アリ 腺腫アリ 淋巴細胞竈アリ	

第3章 所見 概 括

以上檢セル諸種ノ肝硬變症例ニ於ケル甲狀腺ノ所見ヲ各項ニ分チ次ニ概括セントス。

第1節 間 質

1 血管 太キ大ナル血管ニ於ケル血液充盈度ヨリハ、ムシロ細小ナル血管、即チ濾胞周圍ニ於ケル毛細血管ニ於ケル血液充盈度ノ如何ヲ主トシテ比較研究セリ。然ルニソノ充盈度ハ例ニヨリ甚ダ不等ニシテ、強キモノニ於テハ各毛細血管ガ強ク血球ヲ以テ充サレ、其ノ甚シキモノニ於テハ血管ノ腔著明ニ擴大シテ實質ヲ排壓シ、ソノ部ノ上皮細胞列ハ濾胞腔ニ向ヒ多少隆起セル形トナルコトアリ。又充盈度弱キモノニ於テハ血管内ニ血球ヲ容ル、部甚ダ少ク、ソノ腔ノ狹小ナルモノアリ。然レドモソノ充盈度ニハ各例ノ間ニ差違アルモ肝硬變ノ種類ニ應ジテノ相違ヲ認メシメズ。而モ著シキ充盈ヲ示セルモノナク、概シテ中等度ノモノ多シ。

小ナル血管壁ニ於テソノ内壁ガ數個ノ圓形或ハ橢圓形ノ核ヲ有スル細胞群ニヨリ管腔ニ向ヒテ突出シ、腔ヲ狹隘ナラシムル如キ像ヲ呈スル定型的ナル所謂「クノスペン」ヲ7例(第6, 11, 17, 19, 20, 27, 30例)ニ認メ得タリ。

第15例ニ於テハ標本ノ中央部結締織中ニ赤血球ノ瀰漫性ニ血管外ニ存スル竈ヲ認メタリ。然レドモ該出血竈ハ甚ダ小ナルモノニシテ、周圍組織ニ變化ヲ及ボセル如キ著シキモノニハアラズ。

2 結締織 小葉間結締織及小葉内結締織ノ増生ノ度ハ一般ニ略平行シテ觀ラレ、特ニソノ何レカ一方ガ著シキ増生ヲ示セル如キ例ヲ觀ズ。又膠基纖維ト格子狀纖維トノ増生ノ度モ略平行セリ。而シテ間質結締織ノ多寡ハ腺中ノ場所ニヨリ、又切レ方ニヨリ差アルモノナレバ其ノ點ヲ考慮シ判定スベキ要アリ。第12例ニ於テハ標本ノ一部ニ於テ強ク結締織ノ増生アリテ小豌豆大結節狀ヲ呈シ、中心部ニテハ纖維ハ稍纖維素樣觀ヲ呈セリ。

余ノ諸例ニ於テハ一般ニ結締織ノ増生強ク、特ニ萎縮性肝硬變症例ノモノニ於テ其ノ度強シ、且ツ高年齢ノモノハ壯年期ノ例ニ比シ一般ニ増生度強シ。然レドモ増生ノ度ハ各例ニヨリ可ナリノ差違ヲ示セリ。今甲狀腺ニ於ケル結締織増生ノ度ヲ肝臟ニ於ケル結締織増生度ト比較對照スルニソノ強サニ於テ必ズシモ平行關係ヲ示セルモノトハ認メラズ。

3 淋巴細胞竈其他 小葉間間質ノ部ニ淋巴細胞及一部「プラスマ」細胞ガ集積シテ竈ヲ形成セルモノヲ萎縮性肝硬變症例ニ於テ4例(第7, 9, 14, 21例)、其他ノ例ニ於テ3例(第29, 31, 34例)ニ認メタリ。又此内男性例ハ3例、女性例ハ4例ナリ。内第14, 29例ニ於ケルモノハ最も著シキモノナルモ何處ニモ胚中心ト觀得ベキモノモナク、高度ナルモノニハアラズ。

小葉間結締織中ニ脂肪細胞ノ存在ヲ認ムルコト比較的シバシバニシテ、9例(第2, 5, 7, 8, 9, 12, 22, 27例)ニ於テ同細胞ヲ可ナリノ數ニ認ムルコトヲ得タリ。内第19例ニ於テハ比較的多數ノ場所ニ認メラタリ。カハル脂肪細胞ガ集リテ脂肪組織ノ小竈ヲナセル如キモノアリ。

5例(第5, 7, 11, 18, 32例)ニ於テ核ガ圓形乃至橢圓形ヲ呈シ、普通ノ濾胞壁上皮細胞ノ核ニ比シテハ稍大ニシテ細胞體ノ淡明ニ染レル細胞ヨリ成レル特殊ナル上皮性細胞巢ヲナセルモノアルヲ認メタリ。何レモ小濾胞大細胞巢ニシテ僅少ナル結締織ニヨリテ周圍組織トハ境界セラル。此ノ細胞巢ハ全ク同様ノ細胞ノ單ナル實質ノ集合ヨリ成ルモノ多キモ第18例ノモノニ於テハ内ニ僅カニ腔ヲ形成シ、「エオジン」ニ淡染スル同質性ノ膠樣質ニ似タル物質ヲ容ル。又第5, 18, 32例ニ於テハカハル細胞巢ガ數個相集マレリ。

是等細胞巢ヲ形成セル細胞ニ核分割像ノ如キ著シキ進行性變化ヲ呈セルモノヲ認メズ。

2例(第7, 22例)ニ於テ小葉間ニ明ニ上皮小體ノ小組織ヲ認メ、又第20例ニ於テハ甲状腺被膜ニ近キ部ニ小ナル軟骨組織存スルヲ認メタリ。ソノ周圍ハ強ク結締織ヲ以テ圍繞セラレタリ。

第8例ニ於テハ小ナル竈存シ、ソノ中心部ハ細胞成分壞死ヲ現シ、周縁部ニハ淋巴細胞、「プラズマ」細胞ノ集合アリ、同時ニ Langhans 氏型ノ多核巨細胞ヲ伴ヘル定型的ノ粟粒結核竈ナリ。

第2節 實 質

1 濾胞ノ大サ及形狀 各例個々ニ於テ著シク其ノ趣ヲ異ニシ、且又同一標本ニ於テモソノ差著シキモノナリ。ソノ内相當ナル大サ以上ノ濾胞ニ就キ概觀的ニ大サヲ表現シ、又相當ナル大サ以上ノ濾胞ニ就テ之ヲ類圓形或ハ多角形ト表現セルニ前掲表ニ示セル如シ。

内10例(第1, 6, 12, 13, 16, 18, 21, 22, 28, 33例)ニ於テハ低キ形ノ上皮細胞ニヨリテ圓形或ハ橢圓形ヲ呈シ、内ニ紅色或ハ帶青色ニ染リ、空胞ニ乏シキ膠樣質ヲ容レタル巨大ナル濾胞ヲ1個乃至數個認メタリ。巨大濾胞周圍濾胞ハ壓平セラル、モノ多シ。然レドモ該巨大濾胞ノ存スル部以外ニハ濾胞ノ形態、大サニ關シ一般ニハ何等著シキ相違ヲ認ムルコトヲ得ズ。唯其他ニ濾胞間ノ隔壁消耗シテ相融合シ、壁ノ一部ガ突起狀ヲナシテ殘レル如キ瓢形或ハ不整形ヲ呈スル像ヲ認ムルコトアルモ一般ニ稀ナリ。

2 上皮細胞 ソノ形各濾胞ニヨリ、又例ニヨリ殆ド一定セズ。一般ニ(以下次ニ記載スル結節性增生及ビ「ボルスター」ノ像ヲ呈スル部ヲ除キテ觀察ス)骰子形或ハ稍低キ骰子形ヲ呈スルモノ多シ。著シク低キ上皮細胞ニシテ扁平或ハ内被細胞様ノ像ヲ呈スル上皮細胞ヲ多ク有スル如キ例ハ著シク稀ニシテ、僅カニ第19, 28, 34例ニテソノ傾向アルニ過ズ。又圓柱狀ヲ呈スル如キモノナシ。核ハソノ細胞ノ形ニ應ジ圓形ヨリ橢圓形ヲ呈スルモノ多ク、桿狀ヲ呈スル如キモノハ比較的少シ。

細胞體內ニ於テ「ズダンIIIニヨリテ染色セラル、リポイド」顆粒ハ全例ニ於テ認メラル。顆粒ノ大サハ一般ニ量的ニ多ク證明セラル、細胞ニ於テ大ニシテ、「リポイド」ノ含量少キ細胞ニ於テハ細小ナリ。カ、ル「リポイド」顆粒ノ含量ハ例ニヨル差違著シク、多キモノアリ、又少キモノアルモ、年齢ヲ考慮シ其ノ年齢の差違ヲ除カバ肝臟變化ノ類型ニヨル特殊ナル關係アリト觀ルコトヲ得ズ。

細胞體內ニ於テ褐色ヲ呈スル顆粒ヲ第35例ヲ除ク他ノ全例ニ於テ種々ナル程度ニ認メタリ。ソノ量的相違ハ各例ニヨリ可ナリ著シキモ、多クハ年齢ニヨル差違ト看做シ得ラル、モノナリ。

3 濾胞内容 膠樣質ハ一般ニ「エオジン」ニ染色シ同質性ノモノ多キモ、4例(第5, 10, 24, 32例)ニ於テハ可ナリ多數ノ濾胞ニ於テ其ノ内容中顆粒狀、滴狀又塊狀物ヲ混ズルモノアリ。

又8例(第2, 6, 13, 19, 23, 29, 32, 33例)ニ於テハ可ナリ多數ノ濾胞ニ帶青色ニ染ルモノアリ。内或モノハ斑狀ニ濾胞ノ中心部ノミ帶青色ニ染ル。

其他一般的ニハ紅色ニ染ルモノ、淡紅色ニ染ルモノアリテ同一標本ニ於テスラ一定セズ。又膠樣質中ニ於テ空胞狀ヲナセルモノ及ビ著シク淡染スルモノ、或ハ内容ノ全ク消失セルモノヲ觀ルコトアルモ、カ、ル所見ハ各例ニヨリ可ナリノ相違ヲ認ム。然レドモ是等膠樣質ノ性状ハ全般的ニ觀察シテ肝硬變症例ノ特殊所見トハ做シ得ザルノミナラズ、又各種肝硬變症例間ニ於ケル著シキ相違ヲモ發見セズ。

上皮細胞ガ剝離シテ膠樣質中ニ個々ニ遊離シテ存スルモノヲ全例ニ認メタリ。死後變化トシテ現レタルモノヲ除キ、例ニヨリ、濾胞ニヨリ著シク量的ニ相違アルモ概括的ニハ前掲表ニ示ス如ク、何等著シキ特殊性ヲ有スルモノトハ認メラズ。

17例(第1, 4, 5, 6, 7, 9, 12, 13, 14, 16, 21, 23, 24, 27, 31, 33, 34例)ニ於テ濾胞腔内ニ八面體

ヲナシ「エオジン」ニ紅色ニ染ル結晶體ヲ認メタリ。ソノ發現スル數ハ唯1個ノミノ場合ヨリ第6, 14, 16, 23例ノ如キ無數ニ見ラル、場合アリ。一般ニ各症例略平等ニ分布スルモノノ如シ。

13例(第2, 3, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 17, 19, 20, 25, 29例)ニ於テ濾胞腔内ニ赤血球ノ存スルヲ認メタリ。ソノ量ハ種々ナルモ餘リ著シキモノナシ。内11例(第2, 3, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 17, 19, 20例)ハ前記間質ノ部ニ小出血竈ヲ認メタル例(第15例)ト共ニ萎縮性肝硬變症例ニ屬スルモノナリ。前記八面體結晶ト共ニ認メラル、例ハ僅カニ3例ナリ。

4 結節性増生 萎縮性肝硬變症例ニ於テ10例(第1, 4, 6, 7, 10, 12, 13, 14, 19, 21例)及第32例, 第35例ニ於テ、何レモ似タル性状ヲ有スル特殊ナル形ノ細胞ヨリ成ル上皮細胞性組織アリテ、一般周圍組織トハ區別セラレ結節狀ヲナシ限局セル竈ヲナセリ。即チ此ノ部ニ於テハ細胞ハ互ノ間ニ大小アルモ、一般ニ可ナリ大型ニシテ骰子形ノモノ多ク、時ニ圓柱狀ヲ呈スルモノアリ、又或ハ稍低キ骰子形ノモノアリ。而シテ細胞ノ濾胞腔ニ對スル部ハ腔ニ向ヒテ僅カニ膨隆セルモノ多シ。原形質ノ「エオジン」ニ良染色シ顆粒狀ヲ呈スルアリ、又顆粒ノ著シカラザルアリ、小空胞ヲ含メルアリ又蜂巢狀ヲ呈スルモノアリ。然レドモ一部ニ於テハ「エオジン」ニ濃染シ同質性ヲ示セル細胞ガ時ニソノ間ニ混在ス。而シテ「ズダンIII染色標本」ニ於テハ細胞體ハ滲透性ニ薄ク染ミ、著明ナル顆粒狀ヲ呈スル脂肪滴ハ認ムルコトヲ得ズ。核ハ細胞體ノ大サニ比シ比較的小ニシテ圓キモノ多ク、且ツ比較的「クロマチン」ニ乏シ。細胞ノ中央部或ハ圓柱狀ヲ呈スル細胞ニ於テハソノ濾胞腔ニ近キ部ニ偏在セルモノ多シ。明ナル核分割像ハ認メズ。「エオジン」ニ濃染シ同質性觀アル細胞ニテハ核ノ濃縮セルモノ多シ。

カ、ル細胞ニヨリテ圍マル、濾胞ハ大小甚ダ不平等ニシテ、是等ガ相集リテ1個ノ限局セル竈ヲ形成シ、濾胞ノ形ハ何レモ類圓形ノモノ多ク、著シク多角形、或ハ不整形ヲ呈スルモノナシ。而シテ濾胞腔内ニハ著シク淡染セル薄キ漿液様物ヲ容ル、カ、或ハ全ク之ヲ含マザルモノ多ク、「エオジン」ニ紅色ニ染ル如キ濃キ膠様質ヲ容ル、モノナシ。時ニハ八面體ヲナシ「エオジン」ニ好染スル結晶様物ヲ混ズ。即チ此ノ部ハ結節性増生ト認ムベキ組織像ヲ呈スルモノニシテ、何レモカ、ルモノ標本中1—2ヶ所ニ認メラレ、第6, 21, 31例ニ於テハ特ニ多數ノ個所ニ認メラル。

5 「ポルスター」7例(第1, 6, 8, 12, 13, 17, 22例)ノ萎縮性肝硬變症例ニ於テ、ソノ可ナリ大ナル濾胞ノ一部ニ於ケル上皮細胞ガ他ノ部ニ比シソノ形高ク、稍密ニ排列シ、核ハ「クロマチン」ニ富メリ。而シテソレ等ノ細胞ノ基底側ニ骰子形或ハ之ヨリ稍高キ形ノ上皮細胞ヲ有スル小圓形ノ濾胞數個或ハ時ニ數十個存シ、ソノ部ノ細血管ハ特ニ強ク充盈セルモノ多シ。即チ定型ノ Sanderson-Damberg⁽⁴⁵⁾ノ述ベシ“Polster”ノ形成セラル、モノアルヲ觀ル。内第6, 13例ニ於テハ同様ノモノヲ可ナリ多數ノ場所ニ認ムルコトヲ得、又是等ノ例ノ内第1, 6, 12, 13例ハ一方ニ於テ上記セル結節性増生ノ像ヲ認メシモノナリ。

6 甲状腺腫 腺腫 第14例ニ於テハ稍大ナル濾胞ヨリ成ル結節性膠様性甲状腺腫ノ像ヲ呈シ、第31例ニ於テハ小濾胞性ノ結節性膠様性甲状腺腫ノ像ヲ呈スル部アリ。又第18例ニ於テハ著明ニ周圍ト境界セラレタル小濾胞性結節性實質性甲状腺腫ト認ムベキ部アリテ、何レニモ乳嘴ヲ形成セル如キモノナシ。

第12例及第21例ニ於テハ略同様ノ像ヲ呈シ、強ク乳嘴形成アル乳嘴狀腺腫ト認ムベキ小ナル竈アリ。腔内ニハ「エオジン」ニ染ル同質性ノ膠様質ヲ充滿セリ。

第34例ニハ著シク大ナル核ヲ有スル細胞ニシテ、ソノ排列稍不規則ニシテ強ク乳嘴形成アル乳嘴狀腺腫ヲ呈スル部(豌豆大)アリ、ソノ周圍ハ強ク結締織ヲ以テ圍繞セラル。又第12例ニ於テハ上記セル腺腫トハ

別ノ部ニ強ク増生セル結締織ヲ中心トシ、ソレヨリ周圍ニ向ヒ放線狀ニ索狀ニ走リ、且ツ一部ニ乳嘴形成アル腺腫アリ。其ノ細胞ノ性状ハ第34例ニ觀シモノニ似テ核ハ大ナリ。而シテ兩例ハ共ニ腔内ニ僅少ノ膠樣質ヲ容レ、顆粒狀ヲ呈ス。然レドモソノ上皮細胞ニ核分割像ヲ認メズ。

第4章 考 按

第1節 間 質

1 結締織増生

甲状腺ニ於ケル間質結締織ノ増加ハ種々ナル條件ニヨリテ惹起セラル、モノナリ。

此際常ニ注意スベキハ年齢ノ相違ニヨル生理的變化ニシテ、一般ニ老年者ニ於テ結締織ノ増加ヲ觀ルコトハ以前ヨリ諸氏 (Wölfler⁽⁶³⁾, Müller⁽³⁷⁾, Ziegler⁽⁷⁰⁾, Clerc⁽⁶⁾, 中村⁽³⁹⁾等)ニヨリテ認メラレシトコロナリ。又地域的ニモ Sanderson-Damberg⁽⁵⁴⁾, Clerc⁽⁶⁾等ノ述ベシ如ク甲状腺腫地方ト非甲状腺腫地方トノ間ニ相違ヲ觀ルモノナリ。余ノ例ニテハ著シキ地域的相違アリトハ認メラレザルモ、比較的老年者多キヲ以テ此ノ年齢的變化ニハ注意スベキモノアリ。

而シテ最モ興味アルハ疾病トノ關係ニシテ種々ナル疾病ノモトニ種々ナル程度ノ結締織増生ヲ認メラレ、之ニ關スル先人ノ研究業績甚ダ多シ。今其ノ一端ヲ窺フニ、傳染性疾患殊ニ慢性ノ疾患ニ於テ増生ヲ觀ルモノナリ。其中著シキハ結核症ニシテ殆ド毎常認メラル (Roger u. Garnier⁽⁵¹⁾, Kashiwamura⁽²⁶⁾, Sarbach⁽⁵⁵⁾, Kehl⁽²⁸⁾, Leffmann⁽³²⁾, 中村⁽³⁸⁾等)、而シテ宮田⁽³⁶⁾ニヨレバ結核症ノ中慢性結核症例ニ於テ特ニ著シキ増生ヲ觀ルト。微毒ニ於テモ増加アルハ Perraud⁽⁴⁸⁾, Busch⁽⁴⁾, Leffmann⁽³²⁾, 福士⁽⁸⁾, 土井⁽⁶⁾等ニヨリテ認メラレタリ。

又急性傳染性疾患中「デフテリー」(Kashiwamura⁽²⁶⁾, 宮村—川島⁽³⁵⁾), 腸チフス」(Roger u. Garnier⁽⁵¹⁾, Kashiwamura⁽²⁶⁾)等ニ於テモ時ニ觀ラル、變化ニシテ、而モ宮田⁽³⁶⁾ノ結核症例ニ於ケル如ク余ノ⁽⁴⁸⁾腸チフス」例ニ於テ、或ハ宮村—川島⁽³⁵⁾ノ「デフテリー」毒素ニヨル動物實驗ニ於テ、何レモソノ經過時間ノ長キモノニ増生度ノ強キヲ認メラル、モノナリ。

又諸種ノ中毒、例ヘバ燈用ガス」中毒(Kashiwamura⁽²⁶⁾), 燐中毒(Gurrieri⁽¹²⁾), 「アルコール」中毒 (Serafini⁽⁵⁷⁾, 山下⁽⁶⁴⁾)等ニ於テモシバシバ認メラル、所ナリ。又悪性腫瘍例ニ於テハ Karlefors⁽²⁵⁾ノ如ク癌腫例ト非癌腫例トノ間ニ顯微鏡的ニ甲状腺ニ差違ヲ認メズトナセル者アルモ、中村⁽⁴¹⁾, 福士⁽⁸⁾, 野坂⁽⁴⁵⁾, 石本⁽²²⁾ノ記セル如ク時ニ間質ニ増生ヲ認ムルモノナリ。而シテ石本⁽²²⁾ハ此際結核症例ニ於ケル増生ノ度ニハ及バザルヲ記載シ居レリ。余⁽⁴⁴⁾ハ又白血病例ノ甲状腺ヲ検査シ、之ニ石本⁽²²⁾ノ癌腫症例ニ於ケル所見ニ一定ノ相似點アルヲ認メ、此際間質ニモ亦輕度ノ結締織増加アルヲ認メタリ。

今余ノ檢セシ如キ肝臟疾患トノ關係ヲ文献ニ徵スルニ余ノ檢セシ分葉肝ノ5例ハ明ニ微毒性ノモノニシテ、微毒例ニ關シテハ前掲ノ如ク慢性傳染性疾患トシテ諸氏ニヨリ、ソノ間質結締織ノ増生ヲ認メラレタルモノナリ。肝硬變症例ニ於テハ、中村⁽³⁸⁾ハ毎常結締織ノ増殖アリテ小葉狀又ハ島嶼狀ニ圍繞セル事著明ニテ殊ニ強ク増殖セル例モアリト言ヒ、福士⁽⁸⁾モ

同症ニ於テ著シキ結締織ノ増生ヲ來シ、又多クハ同時ニ彈力纖維及ビ格子狀纖維ノ増生ヲ伴フト言ヘリ。Goldzieher⁽¹¹⁾モ既ニ肉眼的ニ認メ得ル程度ノ著シキ間質結締織ノ増加ヲ觀タリ。而シテ本田—高橋⁽¹⁹⁾ハ萎縮性肝硬變症例ノ甲狀腺ヲ檢査シ、ソノ何レノ例ニモ結締織ノ増加ニヨル甲狀腺ノ硬化性變化ヲ觀、且ツ他ノ肝臟疾患例ノ甲狀腺所見ト比較對照シテ肝臟疾患例中ニ於ケル甲狀腺ノ硬化ハ萎縮性肝硬變症ノ時ニノミ觀テ、之ニ特有ナル變化ナリトナシ、硬化性毒素ガ甲狀腺ニ作用シテ、ソレニヨリテ間質結締織ノ増加ヲ來シタルモノナラント述ベタリ。Barriet⁽¹⁾ハ多クノ例ニ甲狀腺硬化ヲ見、年齢及肝硬變ノ種類ニハ關セザルヲ記セリ。

余ノ例ニ於テハ高年齢ノモノ可ナリ多キヲ以テ、年齢の相違ヲ考慮スルハ甚ダ重要ナルコトナリ。余ノ諸例ヲ觀ルニ一般ニ年齢ト共ニ間質結締織ニ増加アルコトハ、同一種疾患例中ニ於テ比較スル時ヨク認メ得ラル、モ、其以外尙何レノ例ニ於テモ一般ニ結締織ノ増加ハ明ニ認メラル、所ニシテ、特ニ萎縮性肝硬變症例ニ於テ強クソノ増加アルヲ觀察シ得ルハ大體ニ於テ諸氏ノ記載ニ一致セルモノト認メラル。

然レドモ同一種疾患例ニ於テモソノ差可ナリニ著シキモノアルハ、個體的相違ニヨルモノナルカ、或ハ又上記傳染性疾患例ニ於テ述ベシ如キ疾病經過時間ノ長短ニ關係アルモノナルカ、從ツテ肝臟ニ於ケル硬化性變化(特ニ萎縮性肝硬變症例ニ於テ)ト平行的ノモノナルカハ考ヘラル、所ナルモ、組織所見上肝硬變ノ程度ト一致スルモノアルモ、又必ズシモ平行セザルモノアリ。然レドモ肝臟ノ如キ大ナル臟器ノ結締織増加程度ハ臟器ノ場所ニヨリ多少ノ差違アリテ比較ニ困難ナルモノナリ、又萎縮セル場合ニ於テ外觀的ニ高度ナル結締織ノ増生ヲ示スコトモアリ。從テムシロ臨床上ノ事項、年齢、脾腫、腹水等種々ノ他ノ要約ヲモ併セ考慮スベキモノニハアラザルカヲ考ヘシムルモ、余ノ用ヒシ如キ少數ノ屍體材料ヲ以テシテハ之ヲ明ニシ得ザルモノアリ。

又余ノ諸例中萎縮性肝硬變症例ニ於テ甲狀腺ハ比較的輕度ノ間質結締織増加アルモノ存スルニ反シ、他ノ種ノ肝硬變症例ニ於テ比較的高度ノ結締織ノ増加アルモノヲ觀ルアリテ、本田—高橋⁽¹⁹⁾ノ言ヘル如キ肝疾患中甲狀腺ノ硬化性變化アルハ萎縮性肝硬變症ノ場合ニ特有ナル變化ナリトハナシ難ク、萎縮性肝硬變症ノミナラズ他ノ肝硬變症、分葉肝例等ニ肝臟ニ結締織増加ノ見ラル、場合甲狀腺ニ於テ結締織ノ増加ハ認メラル、モノナリ。而シテ大體ニ於テ萎縮性肝硬變症例ニ増加ノ程度高キモノ多キ如シ。

2 淋巴細胞竈

間質ノ部ニ淋巴細胞ノ集積セルモノヲ7例ニ認メタリ。此ノ淋巴細胞竈出現ニ關シテ文獻ヲ觀ルニKocher⁽³⁰⁾ハBasedow氏病甲狀腺ニ於テ特ニシバシバ淋巴様組織、或ハ胚中心ヲ伴ヘルモノヲ觀ルト言ヒ、Vogel⁽⁶¹⁾ハ之ヲ73%ニ、伊藤—鈴木⁽²⁸⁾ハ360例中224例ニミルト言ヒ、何レモ高キ頻度ヲ示セリ。又種々ノ甲狀腺腫(Langhans⁽³¹⁾, Hedinger⁽¹⁵⁾, Hecker⁽¹⁴⁾等)ニ於テモ認メラレ、其他Ruppanner⁽⁵⁸⁾ハ結核性甲狀腺腫ニ於テ胚中心ヲ伴ヘル淋巴細胞ノ集積ヲ認メ、Hashimoto⁽¹³⁾, Brünger⁽³⁾, Reist⁽⁴⁹⁾ハ慢性甲狀腺炎ニ於テ之ヲ觀、且ツReistハ

間質ノ慢性炎症性浸潤ト共ニ淋巴濾胞ノ形成ガ現ル、コトヲ記セリ。又 Mendershausen⁽³⁴⁾ ハ悪性貧血例ニ於テ特ニ13例中12例ニ之ヲ觀ルト言ヒ、又石本⁽²²⁾ ハ癌腫症例ニ於テ62例中9例ニ之ヲ認メタリ。

其他甚ダ種々ナル疾病ノモトニ之ガ認メラレ、又頻度ニ於テモ著シキ相違アルモノニシテ、ソレニ就キテハソノ例ニヨリ又報告者ニヨリ各種々ナル意義ノ附セラル、モノナリ。例ヘバ Langhans⁽³¹⁾ ハ之ヲ胎生期ノ甲状腺、上皮小體及胸腺ノ關係ニ由來ヲ求メ、von Gierke⁽⁴⁰⁾ ハ胸腺淋巴體質ニ關係ヲ求メントシ、Hecker⁽¹⁴⁾ ハ成熟セル女性例ニ多キヲ以テ卵巢機能ト何等カノ關係アラント言ヘリ。一方又慢性炎症性變化ト關聯セシメ、或ハ甲状腺ノ機能的變化ト關係ヲ求ムル等種々ナル説ノ樹テラレ居ルモノナリ。

然レドモ未ダ此ノ方面ニ定説ナキモノノ如ク、或ハ一元的ノモノニアラズシテ種々ナル原因ノモトニ之ガ出現シ得ルモノトモ考ヘラレ、Hecker⁽¹⁴⁾ モ原因ガ同一ノ性質ニハアラザルコトヲ述ベタリ。

然ルニ Simmonds⁽³⁵⁾ ハ多數ノ例ヲ検査シテ50歳代、60歳代ニ於テハ20歳代ニ於ケル3倍ノ頻度ニ觀ラレ、且ツ女性例ニ多ク(男性例ノ4倍)觀、又氏ハ正常甲状腺ニ於テモ認メ得ルモノトナセリ。

余ノ例ニ於テハ比較的高年齢ノモノニ多ク、且ツ胚中心ヲ認ムル如キモノナク、比較の輕度ノ變化ヲ示スモノニシテ、又其ノ頻度ニ於テモ著シキモノニハアラズ。又本例ノ肝硬變ノ各種類トノ間ノ關係ヲ求メントスルモ何レモ少數ニシテ此ノ間ニ關係アリト爲シ得ベキ著シキ例數ニモ達セズ。茲ニ於テ此ノ變化ハムシロ Simmonds⁽³⁵⁾ ノ言ヘル如キ老年性ノモノニ偶然ニ現レ且ツ肝硬變症トハ特ニ關係ナキモノニハアラザルカト思惟セラル。Hueck⁽²⁰⁾ モ成人ノ尋常甲状腺ニ於テハ既ニ14.4%ニ證明シ得ルコトヲ記載シ居レリ。然レドモ中村⁽³⁵⁾ ハ肝硬變症例ニ於テ増殖セル結締織中ニ圓形細胞ガ瀰蔓性ニ又結節狀ニ集積セル像ヲ認ムルコトアルヲ指摘シ居レリ。

第2節 實 質

1 實質一般ノ態度

余ノ得タル一般の所見ヲ通覽スルニ、ソノ實質ニ於テ上皮細胞ガ比較的骰子形ニ近キモノアリ、又扁平トナレルモノアリ。又膠樣質モ「エオジン」ニ淡染スルモノ或ハ濃染スルモノ、又一部「ヘマトキシリン」ニ染ルモノ、又顆粒狀ヲ呈スルモノ等甚ダ雜多ニシテ、同一疾病例中ニテモ一様ニアラザルモノナリ。

然レドモ吾人ガ動物ノ甲状腺ヲ組織的ニ觀ル場合ニ於テモ上皮細胞、膠樣質ノ状態ガ全ク一致スル如キ場合ハ稀ニシテ多少ノ差違ヲ觀ルヲ普通トス。加フルニ人體例、殊ニ余ノ如キ屍體材料ヲ以テセルモノニ於テハ種々ナル生前ノ條件ニヨリソノ影響ヲ受クルモノト考ヘラレ、從ツテ多少ノ相違ハ免レザルモノナリ。

今余ノ所見ヲ觀ルニ、上皮細胞及ソノ核ノ形態、大サ、濾胞ノ形、大サ或ハ濾胞内容ニ於テ、唯後述スル結節性増生及ビ濾胞新生ヲ除キ、著シキ變化ハ觀ザルモ、之ニ少クトモ機能

充進ノ狀ニアルモノトハ見ルヲ得ズ。

其他ニ10例ニ於テ巨大濾胞ノ存スルヲ認メタリ。之ニ關シ石本⁽³²⁾ハ高年齢ニ於テシバンバ認メ得トセラル、濾胞ノ融合ニヨリテ發生スル場合ト、先天性基礎ノ上ニ立ツ生來性由來ニヨル成因ガ考ヘラルトナセリ。其ノ發生ヲ確定シ得ザルモ、カ、ル巨大濾胞ヲ繞リテ存スル濾胞ニハ圓味少ク平扁化セルモノ多キニ鑑ミ周圍ニ向ヒ壓迫ノ加ヘラレタルハ考ヘ易キ所ナリ。而シテ一般ニソノ濾胞ノ上皮細胞ハ低ク、膠樣質ノ濃厚ナルモノ多ク、此ノ點ヨリ推シソノ部ニ濾胞内容ノ停滯、從ツテ機能低下アルヲ考フベク、該所見ハ萎縮性肝硬變症例ニ於テ特ニ多數ニ認メラレタル事實ニヨリ、萎縮性肝硬變症例ニ於テ特ニ結締織増加シ濾胞内容ノ輸達ノ阻マレ、多少機能低下ノ狀ヲ示セルモノト思惟セラル。

多數例中ノ少數ノ肝硬變症例ヲ檢セシ Selzer⁽³⁵⁾ハ變化ヲ認メザリシモ、Goldzieher⁽⁴¹⁾ハ甲狀腺ハ小サク、實質細胞ハ低ク小ニシテ骰子形乃至扁平、膠樣質ハ淡染シ且ツソノ内ニ核染色性色素ニ染ル斑ヲ有スルコトヲ記載セリ。Barrlet⁽⁴⁾モ膠樣質中ニ Mucikarminニ染ル鹽基嗜好性顆粒ヲ79%ニ認メタリ。又 Fittipaldi⁽⁷⁾ハ肝硬變症例ニ於ケル甲狀腺ニ於テハ實質ノ減少及シバンバ上皮細胞ノ退行性變化ノ觀ラル、コトヲ述ベタリ。本田—高橋⁽⁴⁹⁾ニ據レバ濾胞ハ甲狀腺ガ硬化セル處ニ於テハ萎縮セルモ、所々増大シ膠樣質ハ數例ニテハ稀薄液化シ、滴狀化セルヲ記載セリ。中村⁽³⁸⁾モ膠樣質ガ青染セル顆粒狀又ハ塊狀ヲ呈シテ同質性ヲ失ヘルモノ多キヲ述ベタリ。最近田中⁽⁵⁰⁾ハ黃疸ヲ併發セル肝硬變症例ニ於テ甲狀腺沃度含有量ノ他ノ例ニ比シ著シク少キヲ記載セリ。肝硬變症ニハアラザルモ、最近 Heep⁽⁴⁶⁾ハ吉田ノ O-Amidoazotoluolヲ用ヒテ實驗的ニ動物ノ肝臟ニ高度ノ膽管ノ增生ト肝實質ノ廣範ナル變化及ビ萎縮ヲ觀、又後ニハ肝細胞ノ腺腫様增生ヲ觀察セルニ、ソノ甲狀腺ニ於テハ退行性變化ヲ示シ、膠樣質ノ消失、濾胞腔ノ狹小ヲ來シ、再生ハ觀察シ得ザリシヲ記載セリ。又 Brass⁽²⁾ハ砒素ニテ慢性ニ中毒セシメシ家兎ニテ Scharlachrotölヲ皮下注射セルニ肝臟ニ結節性增生現レ、長キ實驗ニヨリ萎縮性肝硬變症ノ肥大型ト區別シ得ザル如キ纖維化ノ起ルコトヲ觀察シ、又同様ノ廿日鼠ニ之ヲ食セシメシニ甲狀腺ニハ囊胞性變化、上皮ノ重層扁平細胞化等ノ起ルコトヲ觀察セリ。

是等諸氏ノ觀察例ヨリミルニ何レモ少クトモ進行性、殊ニ機能充進ト斷定セルモノニハアラズシテ、ムシロ諸氏モ退行性變化或ハ之ニ近キ像ヲ觀タルモノト謂フベク、概シテ余ノ例モ氏等ノ觀察例ニ近キ像ヲ呈スト謂フベキナリ。

2 結節性增生及濾胞新生

結節性增生ニ就テハ Wegelin⁽⁶²⁾ニ據レバ増大セル甲狀腺小葉トノ區別困難ナル如キ、限局セルモ境界全ク銳利ナラザル濾胞群ニシテ、成熟セル甲狀腺ヨリ發生シ、主ニ彌蔓性膠樣性甲狀腺腫ニ於テ多數ニ見ラレ、又時ニハ彌蔓性實質性甲狀腺腫及ビ尋常甲狀腺ニ於テ觀ラル、モノナリトセラル。

而シテ組織像ニ於テハ種々ナル移行型ノ存スルモノニシテ Wegelin⁽⁶²⁾モ尋常或ハ彌蔓性增生性ノ甲狀腺ト眞ノ腺腫トノ中間ニ位スルモノニシテ、腺腫ノ初期トハシバンバ確實ニ區

別スルコト能ハザル場合アルヲ述ベタリ。事實區別シテ記載セラレタルモノト區別セラレザルモノトアリ。從ツテソノ頻度ヲミルニ結節性増生ノ頻度ヲ記載セルモノハ少キモ、Hueck⁽²⁰⁾ハRostockノ例ニテハ40歳迄ニハ1例、40歳ヨリ60歳迄ニハ38%、60歳以上ニテハ80%ニ觀、又Leipzigノ例ニテハ40歳迄ニハ19%、40歳ヨリ60歳迄ニハ64%、60歳以上ニハ56%ニ認メ、高年齢者ニ多キヲ認メタリ。Hueck⁽²⁰⁾ノ例ハカクノ如ク高頻度ヲ示セルモ、之ハ結節性甲狀腺腫ノ頻度ト共ニWegelin⁽⁶²⁾モ認メシ如ク地域的の差違ノ著シキモノニシテ、結節性甲狀腺腫ニ稀ナル我が金澤地方ニ於テハ著シク稀ナルベキモノト思考セラル。

即チ結節性甲狀腺腫ハ西洋ニ於テハ、Kloepfel⁽²⁹⁾ニ據レバ21歳ヨリ65歳迄ノ例ニ於テFreiburgノ材料ニテハ72%、Berlinノ材料ニテハ40%ニ結節ヲ認メ、Jaffé⁽²⁴⁾ニヨレバChicago附近ニ於ケル結節性甲狀腺腫ハ白人男子ニテ30%、女子ニテ44.7%ナルヲ記セリ。Hellwig⁽¹⁷⁾ハ北アメリカニ於テハ成人甲狀腺ノ約半數ハ結節ノ基礎ヲ有スルコトヲ述ベタリ。此ノ如ク何レモ高キ頻度ヲ示セルニ反シ我が國ノ例ニ於テハOca⁽⁴⁷⁾ハ東京地方ノ70例ヲ檢セルニ結節ヲ觀ルモノナシト言ヒ、引地⁽¹⁸⁾ハ2921例中2.91%ニ結節性甲狀腺腫ヲ認メタリト言フ。我が金澤地方ニ於テハ中村⁽⁴⁰⁾ハ100例中之ヲ8例ニ觀、宮田⁽³⁶⁾(結核症例)ハ105例中僅カニ1例ヲ觀タリ。又是等ニ比シ高頻度ニ觀タリトナセル石本⁽²²⁾(癌腫症例)ニ於テモ僅カニ14%ヲ示スニ過ズ。

茲ニ於テ余ノ検査例ニ於ケル頻度ヲ考察スルニ結節性増生ヲ全例中12例ニ、内特ニ萎縮性肝硬變症例ニ10例ヲ認メ、金澤地方例トシテハ著シク高頻度ナルハ疑ナキモノノ如ク思考セラル。

此ノ結節性増生ノ發生意義ニ關シテハHueck⁽²⁰⁾ハ組織ノ破壊ニ對スル反應或ハ不完全ナル補充、或ハ代償性ノ過剩ナル増生ト解セリ。且ツ同氏ハ攝護腺、乳腺、肝臟ニ於テ之ニ相似ノモノヲ求メ得ベキヲ述べ、Wegelin⁽⁶²⁾モ之ト同様ノコトヲ述ブルトコロアリ。

ソノ機能的意義ニ關シテWegelin⁽⁶²⁾ハソノ上皮細胞ガ強ク扁平ニナリ、或ハ全ク粗ニナリテ強ク剝離セザルカギリハ完全ナル機能ヲ營ムモノト解スベキモノト言ヘリ。

他方余ノ例ニ於テハ8例ニSanderson-Damberg⁽⁵⁴⁾ノ記載セシ如キ定型的ノ“Polster”ヲ認メタリ。之明ニ舊來ノ濾胞ヨリ多數ノ濾胞ノ新生ヲ營ム像ト看ルベク、從ツテ部分的ノ機能充進ヲ意味スルモノト考ヘラル。而シテ此ノ7例ハ共ニ萎縮性肝硬變症例ニシテ、他ノ例ニ於テ觀察シ得ザリシコトハ注目ニ値スルモノナリ。而シテ此ノ正常甲狀腺ニ於ケル頻度ハ結節性増生ト共ニ餘リ明ニハアラザルモ、金澤地方例ニ於テ宮田⁽³⁶⁾ハ105例(結核症例)中3例ニ觀、石本⁽²²⁾ハ62例(癌腫症例)中7例ニ證明セルヨリ觀レバ、余ノ萎縮性肝硬變症例22例中7例ナルハ氏等ノ例ニ比較シテモ甚ダ高キ頻度ヲ示スモノニシテ、萎縮性肝硬變症例ニ於ケル特異ナル所見ノト思考セラレ、多少退行性ニ變化セル實質ニ對スル代償性肥大ノ意味アル變化ト考ヘラル。

茲ニ於テ是等ヲ綜合スルニ余ノ例、特ニ萎縮性肝硬變症例ニ於テハ間質ニ強ク結締織ノ増生ヲ觀、實質殊ニ在來濾胞ニハムシロ退行性變化ト看ルベキモノアリテソレニ對スル代償性

肥大、或ハ之ヲ補充スル意味アルモノト看做スベク結節性増生ガ約半數例ニ近キ高頻度ニ發生シ、同時ニ又一方ニ於テハ在來ノ濾胞ノ一部ヨリ、明ニ機能ノ充進ノ意味有ル濾胞ノ新生ガ多數例ニ認メラレタルモノニシテ、恰モ肝臟硬變ニ際シ一方肝細胞ガ著シク萎縮セル時、ソノ一部ニシバ進行性ヲ呈シ、増生セル肝細胞ノ觀ラレ往々結節性ヲナセルト同一意味アルモノト思惟セラル。而シテ萎縮性肝硬變症例ノ4例ニ於テ甲狀腺ニ結節性増生及濾胞新生ノ兩者ガ觀ラル、ニ反シ、他ノ肝硬變症例ニ於テハ僅カニ2例ノ結節性増生ヲ觀ルノミニシテ濾胞新生ノ像ナク、分葉肝例ニ於テハソノ何レヲモ觀察シ得ザル點ヲ考フレバ、扱ヒシ例數ノ少キヲ以テ明言シ能ハズトシテモ、實質ノ退行性變化ト結締織増加トノ關係及進行性ニ導ク階梯ニ於テ萎縮性肝硬變症例ニ於テハ他ノ硬變例ト異レル關係ニ立ツモノト思惟シ得ベシ。殊ニ宮田ガ多數ノ結核症例ニ於テ可ナリノ結締織ノ増加ヲ觀タルニカ、ハラス、僅カニ3例ノ濾胞新生ト1例ノ結節性甲狀腺腫ヲ觀タルニ過ザルヲ合セ考フル時、結締織増加ト實質ノ態度トニ於ケル關係ニ於テ萎縮性肝硬變症例ニテハ結核症例或ハ分葉肝例等トハ異レル關係ニ立テルモノニハアラザルカラ推測セシム。

近時病理學界ニ於テ光輝アル業績トシテ知ラル、吉田⁽⁶⁵⁾⁽⁶⁶⁾⁽⁶⁷⁾⁽⁶⁸⁾⁽⁶⁹⁾ノ報告ヲ通覽スルニ、O-Amidoazotoluolヲ白鼠ニ投與セシ場合ニハ肝臟ニ原發性肝臟癌ヲ發生シ、此際偶然ニ他ノ要約ニヨリテ稀ニLaennec性肝硬變ノ現ル、ヲ觀察シ、之ヲ家兎ニ與ヘシニ肝臟原發癌ハ觀ラレズLaennec性肝硬變症ヲ起セリ(同様ノコトヲ川村⁽²⁷⁾ハ廿日鼠ニテ、中澤⁽⁴²⁾ハ犬ニテ追試セリ)。然ルニ之ヲ海獺ニ與ヘシ場合ハソノ甲狀腺ニ強キ變化ヲ現シ、上皮細胞ノ變性、「コロイド」ノ消失ヲ來シコ、ニ間質結締織ノ増殖ヲ來シテ粘液水腫ノ場合ニ似タル像ヲ呈シ、加之次ニ上皮細胞ノ増生起リ重層扁平上皮細胞ヘノ化生ヲ觀ルト言ヘリ。即チ萎縮性肝硬變、肝臟原發癌及ビ甲狀腺ノ萎縮、上皮細胞ノ再生、化生トノ間ニ同一ノ原因(O-Amidoazotoluol)ニ對スル組織ノ反應性ニ必ズシモ同一ニアラズシテ他ノ要約(動物ノ種類其他)ノ相違ニヨリ異ル現レヲ示スモノナルヲ明ニシタリ。余ノ例ニ於ケル萎縮性肝硬變症例甲狀腺ニ以上ノ如キ結節性増生、濾胞新生、結締織増加及ビ實質ニ於ケル多少ノ退行性變化ヲ觀察シ得タルハ、ソノ變化必ズシモ同一ナラザルモ尙吉田ノ業績ト多少似タル變化ヲ肝臟(殊ニ肝臟原發癌ヲ伴ヘル例ヲモ含メリ)、甲狀腺ニ於テ共ニ認メラル、モノトモ解セラレ、萎縮性肝硬變症ノ眞ノ原因ハ一様ナラズトシテモ、多少共通スル似タル物質ニ原因セルモノト考フベク、從ツテ此ノ甲狀腺ノ變化モ單ナル偶然ノモノニハアラズシテ之ニ關聯ヲ有スルモノト思考シ得ベシ。

又上述ノ如ク我が金澤地方ニハ稀ナリトセラル、結節性甲狀腺腫ヲ3例ニ觀(内2例ハ萎縮性肝硬變症例ニ屬ス)、又3例(内2例ハ萎縮性肝硬變症例ニ屬ス)ニ乳嚙性腺腫ヲ認メタリ。結節性甲狀腺腫ノ發生意義ニ關シ未ダ定説ナキモノノ如キ今日、之ニ對シ深キ意義ヲ附セントスルモノニハアラザルモ、是等ハ後述甲狀腺組織内ニ上皮小體組織或ハ上皮性細胞巢ヲ發見セルコト等ト共ニ萎縮性肝硬變症ノ發生ニ對スル體質的徵候ノ現ハレトシテ解セラレザルニアラズ。同一外因的的要約ノ下ニアリテモ萎縮性肝硬變症ハ同一様ニ發現スルモノニア

ラズシテ、家族的ニ從ツテ又體質的ニ異リタル内因的要約ノ關係ノ少ナカラズ考フベキモノナレバ、上述ノ關係ノ如キモ考慮ニ値スルモノトナシ得ベシ。

3 上皮性細胞巢其他

Ribbert⁽⁵⁰⁾ノ記載セン如キ上皮性細胞巢ヲ萎縮性肝硬變症例ニ於テ4例、他ニ1例ヲ認メタリ。此ノ發生ニ關シテハ囊⁽⁴⁵⁾ニ甲状腺腫例ノ場合ニ述ベシ如ク、甲状腺ハソノ發生學的關係ヨリ種々ナル異種組織ヲ迷入センムルコトアルモノナレバ、此ノ場合モ Ribbert⁽⁵⁰⁾ノ言ヘル如ク胎生期ノ迷芽ニヨルモノナラントスルモ、之ヲ萎縮性肝硬變症例ニ於テノミ特ニ多數例ニ觀タルハ單ニ偶然ノモノトハナシ能ハザルモノアリ。

又上皮小體組織ノ迷入セルモノヲ萎縮性肝硬變症例ニ1例、他ノ例ニ1例ヲ認メ、又軟骨組織ヲ萎縮性肝硬變症例ニ1例認メタリ。上皮小體組織ヲ認ムルコトハ家兎ノ如キ動物ニ於テハシバシバナルモ、人體例ニ於テハサホドシバシバ觀ラル、モノニハアラス。人體ニ於ケル觀察ハ Getzowa⁽⁴⁹⁾ニヨリテ詳細ニナサレ、又 Hueck⁽²⁰⁾、福士⁽⁶⁾モ之ヲ觀タリ。軟骨組織ヲ觀ルコトハ Verson⁽⁶⁰⁾等ニヨリテモ認メラレ、Wegelin⁽⁶²⁾ノ述ブル如ク腮弓ニ由來スルモノナルベシ。是等上皮小體組織或ハ軟骨組織ヲ認メタルコトハ敢テ稀ナリトスルニハ足ラザルモ、余ノ萎縮性肝硬變症例ニ於テ4例ノ上皮性細胞巢ノ存在、及ビ上皮小體組織、軟骨組織ヲ各1例ニ認メ得ルハ、結節性甲状腺腫ノ見ラル、コトヲモ併セテ、共ニ萎縮性肝硬變症例ニ於ケル甲状腺組織ニ異種組織ヲ迷入或ハ畸形ノ多キヲ思ハシメ、萎縮性肝硬變症發生ト甲状腺成形トノ間ニ於テ前述セル如ク體質的關聯アルヲ推測セシム。殊ニ結締織增生ヲ伴フコト多キ結締織性又纖維性素質ガ甲状腺ノ成形及機能異常ト一程度ノ關聯ヲ以テ成立セルモノト認ムベキモノニアラザルカ。

4 濾胞内出血及結晶體

萎縮性肝硬變症例ニ於ケル11例ト他ノ2例ニ於テソノ濾胞腔内ニ赤血球ノ溢出セル像ヲ觀タリ。又萎縮性肝硬變症例ニ小ナル間質結締織中ニ赤血球ノ出デテ小出血竈ヲ形成セルモノアリ。Wegelin⁽⁶²⁾ニ據レバ大ナル限局セル出血ハ尋常甲状腺ニ於テハ稀ナルコトニ屬シ、唯外傷性ノ場合ニノミ來リ、又 Lüthi⁽³³⁾ノ實驗セル如キ靜脈性鬱血即チ急性鬱血ノ場合ニ觀ラルト述ベタリ。Isenschmid⁽²¹⁾ハ猩紅熱、「デフテリ」、破傷風、腦脊髓膜炎、心内膜炎等ノ例ニ出血アルヲ觀、Lüthi⁽³³⁾ハ犬ノ甲状腺靜脈ヲ結紮シ鬱血ヲ起サシメ、ソノ甲状腺濾胞ニ出血ノアルヲ認メタリ。又 Wegelin⁽⁶²⁾ハ窒息セル新生兒ノ場合ニ大ナル出血アリト言フ。一方又 Isenschmid⁽²¹⁾ハ濾胞内少量ノ出血ハ規則的生理的ナリト言ヘリ。

余ノ例ハ何レモ少量ノモノニシテ大ナル出血竈ヲ形成セルモノニハアラス、且ツ周圍組織ニ出血ニヨル變化ヲ起セル如キモノヲ認メズ。又血管ニ於ケル血液充盈度ニ於テモ概シテ中等度ヲ示セルモノ多シ(死後ニ觀ル血液充盈度ハ必ずシモ生前ノ血液充盈度ヲ示セルモノトハ言ヒ難キモ)。然レドモ萎縮性肝硬變症例ニ於テノミ特ニ多ク觀ラル、ハ該疾患ト出血トノ間ニ多少ノ關係アルモノノ如ク、Rössle⁽⁵²⁾ニヨレバ肝硬變症ノ場合ハ臨床上門脈系統ノ鬱血ニヨル胃腸ヨリノ出血ノミナラズ、門脈鬱血ニ無關係ノ鼻、咽喉、口腔ヨリノ出血ノ現ル

ルコトアリト言ヘル如ク、甲狀腺ニ於テモ或ハ萎縮性肝硬變症例ノ場合ニ小ナル出血ノ來ルコト特ニ多キモノニハアラザルカ。

福士⁽⁶⁾ハ濾胞内出血ニ伴ヒテ結晶體ヲ觀ルコト多シト言ヘルモ余ノ觀察ヨリシテハ、出血ニ反シ結晶體ノ出現ハ各例共略平等ニシテ且ツ出血ト結晶トヲ共ニ認メ得ル例ノ少キヲ以テ觀レバ、ムシロ此ノ兩者ハ互ニ無關係ノ位置ニアルモノニハアラザルカラ思ハシム。

第5章 結 論

本篇ハ肝臟ニ萎縮性肝硬變症ヲ有スルモノ22例(中肝臟原發癌ヲ伴ヘルモノ2例)ヲ主體トシ、其他5例ノ分葉肝、5例ノ鬱血性肝硬變症、2例ノ Banti 氏病及ビ1例ノ小兒期肝硬變症ヲ有スルモノニ就キノ肝臟所見ヲ參考トシ、甲狀腺ヲ病理解剖學的並ニ組織學的ニ研究セルモノノ記載ナリ。

1 甲狀腺間質結締織ハ萎縮性肝硬變症例ニ於テ一般ニハ特ニ増加セルヲ認ム。認レドモ此ノ變化ハ必ずシモ本疾患ニノミ特有ナル變化ニハアラズ。

2 甲狀腺間質結締織中ニ淋巴細胞竈ヲ認ムルコトアルモ、此等肝臟疾患トノ關係ハ求メ難シ。

3 甲狀腺實質ニハ一般ニ退行性變化アルモノノ如シ。然レドモ萎縮性肝硬變症例ニ於テハ可ナリ多數例ニ結節性增生或ハ濾胞新生ヲ認ム。之實質ノ退行性變化ニ對シ、代償性ノ意味ヲ有スルモノト認メラル。

4 其他甲狀腺組織中ニ結節性甲狀腺腫、上皮性細胞巢、上皮小體組織及ビ軟骨組織ヲ認ムルコトアルモ、是等ハ萎縮性肝硬變症例ニ多ク觀ラレタリ。此ノ事實ハ萎縮性肝硬變症發生上ニ於ケル體質的關係アルベキヲ察セシム。

5 甲狀腺濾胞腔内ニ赤血球及ビ八面體ヲナセル結晶體ノ存スルモノヲ認メタリ。此ノ兩者出現ニ關シテハ互ニ無關係ノモノノ如シ。而シテ赤血球ノ出現ハ萎縮性肝硬變症例ニ來ルコト多キ如シ。

文 獻

- 1) **Barrlet**, Les glandes à sécrétion interne dans la cirrhose hépatique. Ann. Anat. path. 9, Nr. 4, 1932, 385. Ref. Centralbl. f. allg. Pathol. u. pathol. Anatom. Bd. 55, 1932, S. 194. — 2) **Brass**, Zellwucherungen in Leber und Schilddrüse durch enterale oder parenterale Zufuhr von Scharlachrot. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 50, 1936, S. 63. — 3) **Brünger**, Ueber Operationstod bei Thyreoiditis chronica. Mitt. a. d. Grenzgeb. d. Med. u. Chirurg. Bd. 28, 1915, S. 213. — 4) **Busch**, Zur Frage der Veränderungen der Schilddrüse bei Syphilitikern. Centralbl. f. allg. Pathol. u. pathol. Anatom. Bd. 25, 1912, S. 772. — 5) **Clerc**, Die Schilddrüse im hohen Alter. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 10, 1912, S. 1. — 6) **土井**, 先天性徽毒病理解剖組織學的研究. 日本醫科大學雜誌 第4卷, 昭和8年, 900頁. — 7) **Fittipaldi**, Die endokrinen Organe bei der Leberzirrhose. Centralbl. f. allg. Pathol. u. pathol. Anatom. Bd. 61, 1934, S. 217. — 8) **福士**, 甲狀腺ノ病理解剖學的方面. 日本病理學會會誌

第14卷, 大正13年, 3頁. — 9) **Getzowa**, Ueber die Glandula parathyreoidea, intrathyreoideale Zellhaufen derselben und Reste des postbranchialen Körpers. Virchows Arch. Bd. 188, 1907, S. 181. — 10) **Gierke**, zit. nach Simmonds (58). — 11) **Goldzieher**, Konstitution und Pathogenese der Leberzirrhose. Wiener med. Wochenschr. Jg. 71, 1921, S. 225. — 12) **Gurrieri**, zit. nach Wegelin (62). — 13) **Hashimoto**, Zur Kenntnis der Lymphomatösen Veränderung der Schilddrüse (Struma lymphomatosa). Arch. f. klin. Chirurg. Bd. 97, 1912, S. 219. — 14) **Hecker**, Ueber das Vorkommen von lymphadenoidem Gewebe in der normalen und strumös veränderten Schilddrüse. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 28, 1922, S. 96. — 15) **Hedinger**, Zur Lehre der Struma sarkomatosa. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 3, 1909, S. 487. — 16) **Heep**, Zellwucherungen in Leber und Schilddrüse durch enterale oder parenterale Zufuhr von O-Amidoazotoluol. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 50, 1936, S. 48. — 17) **Hellwig**, Die Lebenskurve der nordamerikanischen Schilddrüse. Endokrinol. Bd. 12, 1933, S. 323. — 18) **引地**, 日本人甲状腺重量 = 關スル統計. 東北醫學雜誌 第16卷, 昭和8年, 87頁. — 19) **本田, 高橋**, 肝硬變症(輪狀硬變症)ノ研究(第6報)就中, 肝硬變症ノ際ノ甲状腺ノ組織學的變化 = 就テ. 日本病理學會會誌 第25卷, 昭和10年, 417頁. — 20) **Hueck**, Ein Beitrag zur Beurteilung der Knoten in der Schilddrüse. Deutch. Zeitschr. f. Chirurg. Bd. 174, 1922, S. 185. — 21) **Isenschmid**, Zur Kenntnis der menschlichen Schilddrüse in Kindesalter. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 5, 1910, S. 205. — 22) **石本**, 癌腫症ニ於ケル内分泌腺ノ病理解剖學的及組織學的研究. 其ノ3, 甲状腺ノ變化 = 就キテ. 十全會雜誌 第40卷, 昭和10年, 4455頁. — 23) **伊藤, 鈴木**, 甲状腺腫ノ病理學的研究. 1, 最近2ヶ年間 = 經驗セル Basedow 氏病手術例 = 就テ. 日本病理學會會誌 第24卷, 昭和9年, 436頁. — 24) **Jaffé**, The variation in weight of the thyroid gland and the frequency of its abnormal enlargement in the region of Chicago. Arch. of pathol. Vol. 10, 1930, P. 887. — 25) **Karlefors**, Ueber Hypophyse und Thyreoidea bei Krebskranken. Zeitschr. f. Krebsforsch. Bd. 17, 1920, S. 195. — 26) **Kashiwamura**, Die Schilddrüse bei Infektions-Krankheiten. Virchows Arch. Bd. 166, 1901, S. 373. — 27) **川村, 吉田**(69) = 對スル附議. 日本病理學會會誌 第25卷, 昭和10年, 111頁. — 28) **Kehl**, Anatomische Untersuchungen an Schilddrüse von phthisikern. Virchows Arch. Bd. 216, 1914, S. 386. — 29) **Kloepfel**, Vergleichende Untersuchungen über Gebirgsland- und Tieflandschilddrüsen. Beitr. z. pathol. Anatom. u. z. allg. Pathol. Bd. 49, 1910, S. 579. — 30) **Kocher**, Ergebnisse histologischer und chemischer Untersuchung von 160 Basedowfällen Arch. f. klin. Chirurg. Bd. 92, 1910, S. 442. — 31) **Langhans**, Ueber die epithelialen Formen der malignen Struma. Virchows Arch. Bd. 198, 1907, S. 69. — 32) **Leffmann**, Ueber den Einfluss von Infektion auf den Bau der Schilddrüse. Endokrinol. Bd. 10, 1932, S. 43. — 33) **Lüthi**, Ueber experimentelle venöse Stauung in der Hundeschilddrüse. Mitt. a. d. Grenzgeb. d. Med. u. Chirurg. Bd. 15, 1906, S. 247. — 34) **Mendershausen**, Histologische Untersuchungen der endokrinen Organe bei perniziöser Anaemie. Klin. Wochenschr. Jg. 4, 1925, S. 2105. — 35) **宮村, 川島**, 實驗的「デフテリ」毒素中毒家兎ニ於ケル甲状腺ノ組織學的研究. 十全會雜誌 第39卷, 昭和9年, 933頁. — 36) **宮田**, 結核症ニ於ケル内分泌腺ノ病理解剖學的及組織學的研究. 其ノ3, 甲状腺ノ變化 = 就キテ. 十全會雜誌 第35卷, 昭和5年, 1267頁. — 37) **Müller**, Beiträge zur Histologie der normalen

- und der erkrankten Schilddrüse. Beitr. z. pathol. Anatom. u. z. allg. Pathol. Bd. 19, 1896, S. 127.—
- 38) **中村**, 内分泌, 病理學的方面ニ關スル報告. 日本病理學會會誌 第6卷, 大正5年, 3頁. —
- 39) 同人, 内分泌病理ニ關スル研究追加(第2). 日本病理學會會誌 第9卷, 大正8年, 93頁. —
- 40) 同人, 内分泌病理ニ關スル研究追加(第6). 日本病理學會會誌 第13卷, 大正12年, 498頁. —
- 41) 同人, 内分泌病理ニ關スル研究, 殊ニ甲状腺ノ間質ニ注意ス. 日本病理學會會誌 第14卷, 大正13年, 120頁. — 42) **中澤**, o-Amidoazotoluol 飼與試驗ニヨリ犬ニ於ケル輪狀肝硬變症並ニ胃, 十二指腸潰瘍作成ニ就テ. 日本病理學會會誌 第26卷, 昭和11年, 613頁. — 43) **中谷**, 傳染性疾患及中毒例ニ於ケル甲状腺ノ變化. 十全會雜誌 第41卷, 昭和11年, 849頁. — 44) 同人, 白血病例ニ於ケル甲状腺ノ變化. 十全會雜誌 第41卷, 昭和11年, 1630頁. — 45) 同人, 一部ニ扁平上皮細胞癌性變化ヲ呈セル實質性甲状腺腫ニ就テ. 十全會雜誌 第42卷, 昭和12年, 1頁. — 46) **野坂**, 諸種疾患ニ於ケル甲状腺ノ化學的及ビ病理組織學的變化ニ就テ. 内分泌學雜誌 第2卷, 大正15年, 18頁. — 47) **Oca**, Das histologische Bild der japanischen Schilddrüse als Norm. Beitr. z. pathol. Anatom. u. z. allg. Pathol. Bd. 85, 1930, S. 333. — 48) **Perraud**, Histologische Veränderungen der Schilddrüse bei den Syphilitischen nicht lebensfähigen Föten. Centralbl. f. allg. Pathol. u. pathol. Anatom. Bd. 14, 1903, S. 695. — 49) **Reist**, Ueber chronische Thyreoiditis. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 28, 1922, S. 141. — 50) **Ribbert**, Das Adenom der Schilddrüse. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 18, 1916, S. 55. — 51) **Roger** u. **Garnier**, zit. nach Kashiwamura (26). — 52) **Rössle**, Entzündungen der Leber. Handbuch d. spez. pathol. Anatom. u. Histol. von Henke u. Lubarsch. Bd. 5/1, Verdauungsdrüsen. 1930, Berlin. — 53) **Ruppner**, Ueber Tuberculöse Strumen. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 2, 1909, S. 513. — 54) **Sanderson-Damberg**, Die Schilddrüse vom 15 bis 25 Lebensjahr. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 6, 1911, S. 312. — 55) **Sarbach**, Das Verhalten der Schilddrüse bei Infektionen und Intoxikationen. Mitt. a. d. Grenzgeb. d. Med. u. Chirurg. Bd. 15, 1906, S. 213. — 56) **Selzer**, Die Schilddrüse bei Infektionskrankheiten. Virchows Arch. Bd. 294, 1935, S. 427. — 57) **Serafini**, zit. nach Wegelin (62). — 58) **Simmonds**, Ueber Lymphatische Herde in der Schilddrüse. Virchows Arch. Bd. 211, 1913, S. 73. — 59) **田中**, 沃度代謝ノ研究. 其1, 諸種疾患ニ於ケル甲状腺ノ沃度含有量ニ就テ. 十全會雜誌 第41卷, 昭和11年, 2627頁. — 60) **Verson**, zit. nach Wegelin (62). — 61) **Vogel**, Beiträge zur pathologischen Histologie der Schilddrüse. Virchows Arch. Bd. 217, 1914, S. 204. — 62) **Wegelin**, Schilddrüse. Handbuch d. spez. pathol. Anatom. u. Histol. von Henke u. Lubarsch. Bd. 8, Drüse mit innerer Sekretion. 1926, Berlin. — 63) **Wölfler**, Ueber die Entwicklung und den Bau des Kropfes. Arch. f. klin. Chirurg. Bd. 29, 1883, S. 1. — 64) **山下**, 「アルコール中毒ニヨル甲状腺ノ變化ニ就テ. 北海道醫學會雜誌 第6年, 昭和3年, 502頁. — 65) **吉田**, o-Amidoazotoluol ヲ以テセル病理組織學的研究. 第1報告, 甲状腺ノ變化殊ニ濾胞上皮細胞ノ化生の角化. 日本病理學會會誌 第21卷, 昭和6年, 159頁. — 66) 同人, o-Amidoazotoluol ヲ以テセル病理組織學的研究. 第2報, 海獺甲状腺ノ濾胞上皮細胞ノ化生ニ關スル報告及「ラツテ」ニ於ケル經口の投與試驗. 日本病理學會會誌 第22卷, 昭和7年, 934頁. — 67) 同人, o-Amidoazotoluol ニ因ル實驗的ヘパトーム發生ノ際ニ於ケル肝臟ノ變化ノ推移ノ追跡(豫報). 日本病理學會會誌 第23卷, 昭和8年, 636頁. — 68) 同人, o-Amidoazotoluol ニ因ル實驗的ヘパトーム」ノ研究殊ニ癌發生マデノ肝臟ノ變化ノ段階の追跡. 日本病理學會會誌 第24卷, 昭和9年, 523頁. — 69) 同人, o-Amidoazotoluol 飼與試驗ニ於テ發生セル家兎ノ輪狀肝硬變症ニ就テ. 日本病理學會會誌 第25卷, 昭和10年, 409頁. — 70) **Ziegler**, Lehrbuch der spez. pathol. Anatomie. 11 Aufl. 1906.